第 3 回　泉佐野丘陵地緑地 運営審議会（概要版）

日時：平成 29 年 12 月 15 日（金）14:00～17:00

場所：泉佐野丘陵緑地　パークセンター

◆出席委員（敬称略）

大阪府立大学　特認教授　増田昇（会長）

うみべの森を育てる会　代表　西台幸子

大輪会事務局　大西弘薫

泉佐野丘陵緑地パーククラブ　代表　那須利之

泉佐野丘陵緑地パーククラブ　副代表　中川有司

泉佐野丘陵緑地パーククラブ　事務局長　永井利治

◆欠席委員

元大阪府立大学大学院　教授　前中久行

和歌山大学　システム工学部　教授　宮川智子

大阪府立大学大学院　生命環境科学研究科　教授　加我宏之

和歌山大学　システム工学部　准教授　佐久間康富

泉佐野市都市整備部　部長　河井俊二

◆傍聴者　2 名

◆概要

1. 現地確認（東地区）　14:00～

2. 前回のふりかえり　15:00～

3. 協議案件　4 件

①公園づくりの参加について（パーククラブのメンバー募集方法）

②東地区の竹林対策について

（協議）東地区既存林の保全ラインと保全対策

（報告）東地区の竹稈注入処理経過（5 ヶ月経過）

（報告）西地区の植生状況について

③外国人旅行客の公園利用の方向性について

4. 報告案件　5 件

①プログラム報告（9～11 月）、活動計画（12～3 月）

②えんづくりプログラムの募集結果について

③東地区ツアーの実施報告

④企業の森活動体験会及び式典の実施報告

⑤その他

＜前回のふりかえり＞

前回のふりかえりについて、事務局より説明。

＜協議案件１：公園づくりの参加について（パーククラブのメンバー募集方法）＞

公園づくりの参加について（パーククラブのメンバー募集方法)、事務局より説明。

・どこに広報するかが大切である。泉南各紙の広報にきちんと載せていくこと。
・堺ふれあいの森は変更案に近い。新規参加者向けの竹林管理や農作業に関する講義は、公園のメンバーが講師を務めている。そしてスキルアップについては年に 2 回、外部から講師を呼んでいる。
・パークレンジャー養成講座は、パーククラブの資格認定講座ではない。「養成講座」だといえば、受講生が来るだろうという発想だった。パーククラブのメンバー募集では来ないと考えた。講義であれば高齢者大学や環境市民講座のようなものでも、リタイア層を中心に趣味で参加する人はたくさんいる。
・パーククラブの活動日に一般の人も参加できる日を設定し、その日に参加すればクラブのことを知ってもらえるようにしたい。入会せずとも活動に参加できる方法もよいと考えている。
・本件は継続審議として、パーククラブ内部でも話し合ってもらいたい。
・基本的にはパーククラブが講師陣。そして景観形成や植生調査などの専門知識を得るために、講師を呼んでスキルアップ講座をすればよい。例えば年に 2 回のスキルアップ講座を開催するならば、パーククラブが学びたい内容を提案してもらいたい。
・スキルアップ講座もオープンにしてもいのではないかと思っている。パーククラブのみを対象とする必要もないのかもしれない。
・年間プログラムの募集について。例えば農業であれば苗植えから収穫まで、10 家族程を募集する。
・農作業についてはわかりやすい。苗植えから収穫あるいは餅つきまでをセットにして募集するとよい。園路作りについては、一気通貫で関わることのおもしろさを工夫して伝える必要があるだろう。花については、四季の花を年間を通じて観察するというプログラムが考えられる。

＜協議案件２：東地区の竹林対策について＞

事務局より東地区の竹林対策について説明

・例えば今後 2～3 年は開園しないとする。1 つは、その間は周回イベントを開催するとして、そのための見せ場を作ることを目的に管理を行うことが考えられる。
・もう 1 つは、植生を劣化させないために、当面は利用を考えずに対策をしておきたいということが考えられる。これら 2 種類ほどのシナリオがあれば議論することができる。

・例えば植生の劣化抑制のためだけに予算化することはもったいないだろうから、観察会のようなことも年に何回か想定しておいたほうがよいのではないか、府民サービスとしてどのように還元していくのか、など、運営者側としては提案を考えなければならない。
・実現有無に関わらず、5 年位のビジョンは持ちながら作業しなければならない。
・今回は、西地区も植生劣化を考える必要はあるという貴重な意見があった。もう 1 つは、東地区の暫定的な利用と植生劣化の抑制を分離して考えるのか、並行して考えるのか。
・PR 用の広報をするのであれば、プロの写真家を入れるべき。そのようにしてファンづくりに取り組む必要がある。プロの撮る写真と説明用に撮る写真は、全く感動が違う。
・普通の開園した公園では、少し木を切るということはなかなかできない。ここはそうではなく、パートナーであるパーククラブが管理し、気づいたところがあれば常に修正を加えることができるということが特徴である。このような可変型モデルというのはこれまでの公共事業や公共施設運営では見られなかったことで、この公園の先進性の 1 つである。
・今は自分で、常に自分にフィットする形に改変できるというライフスタイルに変わってきている。公共施設も、常に変えていくことができるというモデルに転換してかなければならない。この公園はその実験場としての先進性を秘めている。

＜協議案件３：外国人旅行客の公園利用の方向性について＞

外国人旅行客の公園利用の方向性について事務局より説明。

・こちら側の都合だけで考えているように思える。自分が外国人だとすると、ここはあくまでも普通の公園の 1 つにしか見えないので、わざわざ足を運ぶとは考えづらい。
・来園者数を増やすための 1 つの戦略と考えると、コストパフォーマンスをしっかりと考えなければならない。通訳なども自分たちで全部やるとなると、コストパフォーマンスが見合わなくなってくる。
・体験型プログラムに参加してもらうとすると、まずパーククラブのイベント日数はあまり多いわけではない。では大阪府で準備するとなると、コストパフォーマンスが悪い。このあたりのルールを、もっと詰めて考えたほうがよいだろう。
・最近の日本に来る外国人のすごい点は、人気の場所であれば、日本で入手できるものよりも詳しい地図を来日前に入手している。したがって、外国人が関心を持ってみる資料等に入り込む形であれば効果も大きいと思われる。
・民泊となると普通の住宅地に入り込むことになるので、アクセスに関する動画も配信している。そのようなことを介在する会社まである。そのようなことを取り入れておかないと、自分たちだけでやるのはコストパフォーマンスが悪い。例えば泉佐野市の観光ビューローが事務局をやるので、オプショナルツアーとして加えてほしいということであれば、やりやすい。
・その場合も、どのように広報するかを考えなければならない。例えば関空の配架にチラシを置くのか。ホームページに情報を載せてもアクセスしてもらえないので、どのような経路で

アクセスしてもらうのか。この部分は戦略的に考えなければ、モニターツアーに参加者がいないという結果になってしまう。

・大学と連携することは良いことだと思う。目的によらず、何かしらの形で大学生に関心を持ってもらうこと自体に意味があると考えている。

・観光大学では学生が関空で無料通訳に取り組むという活動をされているはずである。そのようなことも含めて考えるとよい。

＜報告案件１：プログラム報告（9～11 月）、活動計画（12～3 月）＞

実施済みのプログラムと今後の活動計画について永井委員と事務局より報告。

・来園した小学校については、きちんとリスト化しておくこと。開園以来、どんな小学校が、何年生が来ているのかを把握しておくように。地元学習があるのは 4 年生だと思われる。堺市の場合は 4 年生である。泉佐野の 4 年生が地元を学ぶことを目的に、丘陵部があるという理由で公園に来てくれると喜ばしいことである。

・堺自然ふれあいの森では、近隣の緑化祭では必ず出展してほしいと言われている。また収穫祭や区民祭への出展依頼も受けている。外国人の呼び込みよりも大切なのは、地元のイベントに出展して認知度を広めていくことである。積極的に出前をする必要がある。

＜報告案件２：えんづくりプログラムの募集結果について＞

えんづくりプログラムについて事務局より報告。

＜報告案件３：東地区ツアーの実施報告＞

パークレンジャー養成講座について事務局より報告。

＜報告案件４：企業の森活動体験会及び式典の実施報告＞

企業の森活動体験会及び式典について事務局より報告。

・例えばパーククラブのスキルアップ講座として行う内容も、大輪会の皆さんや一般府民にも参加していただけるようにするなど、単発のものはもっと共通性を高めて実施する。一方で１年間を通じて取り組む登録型プログラムにも、大輪会にも一般にも声をかけるなど。このあたりのことをもう一度整理する時期にきていると思われる。

＜報告案件５：その他＞

大阪府商工労働部より太陽光発電について報告。

以上